



日本標準商品分類番号	872189	
	5mg	10mg
承認番号	22300AMX01141000	22300AMX01142000
薬価収載	2011年11月	2011年11月
販売開始	2011年11月	2011年11月

貯法: 気密容器、室温保存
(開封後は湿気を避けて保存すること)
使用期限: 包装に表示
(使用期限内であっても開封後はなるべく速やかに使用すること)

処方箋医薬品(注意-医師等の処方箋により使用すること)

HMG-CoA還元酵素阻害剤

アトルバスタチン錠 5mg「サンド」

アトルバスタチン錠 10mg「サンド」

Atorvastatin Tablets 5mg・10mg [SANDOZ]

日本薬局方 アトルバスタチンカルシウム錠

【禁忌】(次の患者には投与しないこと)

- 本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者
- 肝代謝能が低下していると考えられる以下のような患者
急性肝炎、慢性肝炎の急性増悪、肝硬変、肝癌、黄疸
[他社が実施した臨床試験において、肝硬変患者では、アトルバスタチンの血漿中HMG-CoA還元酵素阻害活性体濃度が健康成人に比べて上昇した(AUCで44~9.8倍)成績がある。したがって、これらの患者では本剤の血漿中濃度が上昇し、副作用の発現頻度が増加するおそれがある。また、本剤は主に肝臓において作用し代謝されるので、肝障害を悪化させるおそれがある。]
- 妊婦又は妊娠している可能性のある婦人及び授乳婦
(「6. 妊婦、産婦、授乳婦等への投与」の項参照)
- グレカプレビル・ピブレンタスビルを投与中の患者
(「3. 相互作用」の項参照)

**

〈効能又は効果に関連する使用上の注意〉

- 適用の前に十分な検査を実施し、高コレステロール血症、家族性高コレステロール血症であることを確認した上で本剤の適用を考慮すること。
- 家族性高コレステロール血症ホモ接合体については、LDL-アフェレーシス等の非薬物療法の補助として、あるいはそれらの治療法が実施不能な場合に本剤の適用を考慮すること。

【用法及び用量】

- 高コレステロール血症
通常、成人にはアトルバスタチンとして10mgを1日1回経口投与する。
なお、年齢、症状により適宜増減するが、重症の場合は1日20mgまで増量できる。
- 家族性高コレステロール血症
通常、成人にはアトルバスタチンとして10mgを1日1回経口投与する。
なお、年齢、症状により適宜増減するが、重症の場合は1日40mgまで増量できる。

【使用上の注意】

1. 慎重投与(次の患者には慎重に投与すること)

- 肝障害又はその既往歴のある患者、アルコール中毒の患者 [本剤は主に肝臓において作用し代謝されるので、肝障害を悪化させるおそれがある。また、アルコール中毒の患者は、横紋筋融解症があらわれやすいとの報告がある。]
- 腎障害又はその既往歴のある患者 [横紋筋融解症の報告例の多くが腎機能障害を有する患者であり、また、横紋筋融解症に伴って急激な腎機能の悪化が認められている。]
- フィブラート系薬剤(ベザフィブラート等)、免疫抑制剤(シクロスポリン等)、ニコチン酸製剤(ニセリトロール等)、アゾール系抗真菌薬(イトラコナゾール等)、エリスロマイシンを投与中の患者 [一般にHMG-CoA還元酵素阻害剤との相互作用により横紋筋融解症があらわれやすい。(「3. 相互作用」の項参照)]
- 糖尿病の患者 [糖尿病を悪化させることがある。]
- 甲状腺機能低下症の患者、遺伝性の筋疾患(筋ジストロフィー等)又はその家族歴のある患者、薬剤性の筋障害の既往歴のある患者 [横紋筋融解症があらわれやすいとの報告がある。]
- 高齢者(「5. 高齢者への投与」の項参照)

【組成・性状】

販売名	アトルバスタチン錠 5mg「サンド」	アトルバスタチン錠 10mg「サンド」				
有効成分	日局 アトルバスタチンカルシウム水和物					
含量 (1錠中)	5.42mg (アトルバスタチンとして5mg)	10.84mg (アトルバスタチンとして10mg)				
添加物	乾燥炭酸ナトリウム、結晶セルロース、軽質無水ケイ酸、クロスカルメロースナトリウム、フマル酸ステアリンナトリウム、ヒプロメロース、マクロゴール400、酸化チタン、三酸化鉄 ^(注)					
色・剤形 (又は性状)	ごくうすい紅色円形の フィルムコーティング錠	白色円形の フィルムコーティング錠				
外形	表	裏	側面	表	裏	側面
	直径	5.6mm		6.6mm		
厚さ	2.6mm		3.1mm			
質量	63mg		104mg			
識別コード(PTP)	SA5		SA10			

注)アトルバスタチン錠5mg「サンド」にのみ添加

【効能又は効果】

高コレステロール血症

家族性高コレステロール血症

2. 重要な基本的注意

- (1) あらかじめ高コレステロール血症治療の基本である食事療法を行い、さらに運動療法や高血圧、喫煙等の虚血性心疾患のリスクファクターの軽減等も十分考慮すること。
- (2) 投与中は血中脂質値を定期的に検査し、治療に対する反応が認められない場合には投与を中止すること。
- (3) 腎機能に関する臨床検査値に異常が認められる患者に、本剤とフィブラート系薬剤を併用する場合には、治療上やむを得ないと判断される場合にのみ併用すること。急激な腎機能悪化を伴う横紋筋融解症があらわれやすい。やむを得ず併用する場合には、定期的に腎機能検査等を実施し、自覚症状(筋肉痛、脱力感)の発現、CK(CPK)上昇、血中及び尿中ミオグロビン上昇並びに血清クレアチニン上昇等の腎機能の悪化を認めた場合は直ちに投与を中止すること。
- (4) 近位筋脱力、CK(CPK)高値、炎症を伴わない筋線維の壊死、抗HMG-CoA還元酵素(HMGCR)抗体陽性等を特徴とする免疫介在性壊死性ミオパチーがあらわれ、投与中止後も持続する例が報告されているので、患者の状態を十分に観察すること。なお、免疫抑制剤投与により改善がみられたとの報告例がある。(「4. 副作用(1)重大な副作用」の項参照)
- (5) 劇症肝炎等の肝炎があらわれることがあるので、悪心・嘔吐、倦怠感等の症状があらわれた場合には本剤を中止し、医師等に連絡するよう患者に指導すること。投与中は投与開始又は増量時より12週までの間に1回以上、それ以降は定期的(半年に1回等)に肝機能検査を行うこと。

* * 3. 相互作用

本剤は、主として肝の薬物代謝酵素CYP3A4により代謝される。また、P-糖蛋白質(P-gp)、乳癌耐性蛋白(BCRP)、有機アニオントランスポーター(OATP)1B1/1B3の基質である。

(1) 併用禁忌 (併用しないこと)

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
* * グレカプレビル・ピブレンタスビル(マヴィレット)	グレカプレビル・ピブレンタスビル(400mg・120mg)との併用により、アトルバスタチンのAUCが8.28倍、C _{max} が22.0倍に上昇したとの報告がある。本剤の血中濃度が上昇し、副作用が発現しやすくなるおそれがある。	機序：グレカプレビルのOATP1B1/1B3及びBCRP阻害、ピブレンタスビルのOATP1B1及びBCRP阻害に基づく作用によるものと考えられている。

(2) 併用注意 (併用に注意すること)

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
フィブラート系薬剤 ベザフィブラート等	筋肉痛、脱力感、CK(CPK)上昇、血中及び尿中ミオグロビン上昇を特徴とし、急激な腎機能悪化を伴う横紋筋融解症があらわれやすいとの報告がある。	機序：フィブラート系薬剤とHMG-CoA還元酵素阻害剤との副作用誘発性の相加作用が示唆されている。 危険因子：腎機能に関する臨床検査値に異常が認められる患者
ニコチン酸製剤 ニセリトロール等		機序：ニコチン酸製剤とHMG-CoA還元酵素阻害剤との副作用誘発性の相加作用が示唆されている。 危険因子：腎機能障害

免疫抑制剤 シクロスポリン等	1) 筋肉痛、脱力感、CK(CPK)上昇、血中及び尿中ミオグロビン上昇を特徴とし、急激な腎機能悪化を伴う横紋筋融解症があらわれやすいとの報告がある。 2) シクロスポリンとの併用により、本剤のAUC _{0-24h} が8.7倍に上昇したとの報告がある。	機序：1) シクロスポリンとHMG-CoA還元酵素阻害剤との副作用誘発性の相加作用、2) シクロスポリンによるHMG-CoA還元酵素阻害剤の代謝・胆汁中排泄に対する競合阻害に基づく相互作用、3) シクロスポリンによる本剤の肝への取り込み阻害に基づく相互作用が示唆されている。 危険因子：腎機能障害
* * アゾール系抗真菌薬 イトラコナゾール等 エリスロマイシン	筋肉痛、脱力感、CK(CPK)上昇、血中及び尿中ミオグロビン上昇を特徴とし、急激な腎機能悪化を伴う横紋筋融解症があらわれやすいとの報告がある。	機序：アゾール系抗真菌薬又はエリスロマイシンのCYP3Aに対する阻害作用が考えられている。 危険因子：腎機能障害
* * クラリスロマイシン	本剤の血漿中薬物濃度の有意な上昇(C _{max} ：+55.9%、AUC _{0-Tlast} ：+81.8%)がみられた。	機序：クラリスロマイシンのCYP3A4に対する阻害作用が考えられている。
* * HIVプロテアーゼ阻害剤 ロビナビル・リトナビル メシル酸ネルフィナビル等	ロビナビル・リトナビルとの併用により本剤のAUCが5.88倍、メシル酸ネルフィナビルとの併用により本剤のAUCが約1.7倍に上昇するとの報告がある。	機序：これらの薬剤によるCYP3A4の阻害が考えられている。
* * グラゾプレビル	グラゾプレビル(200mg)との併用により本剤の血漿中薬物濃度が上昇した(C _{max} ：5.66倍、AUC _{0-∞} ：3.00倍)との報告がある。	機序：グラゾプレビルによる腸管のCYP3A及びBCRPの阻害が考えられている。
* * レテルモビル	レテルモビルとの併用により本剤の血漿中薬物濃度が上昇した(C _{max} ：2.17倍、AUC _{0-∞} ：3.29倍)との報告がある。	機序：レテルモビルによるCYP3A、OATP1B1/1B3及びBCRPの阻害が考えられている。
	グレープフルーツジュース	グレープフルーツジュース1.2L/日との併用により、本剤のAUC _{0-72h} が約2.5倍に上昇したとの報告がある。
	エファビレンツ	本剤の血漿中薬物濃度が低下した(C _{max} ：-12%、AUC _{0-24h} ：-43%)との報告がある。
	リファンピシン	リファンピシン投与17時間後に本剤を投与したところ本剤の血漿中薬物濃度が低下した(C _{max} ：-40%、AUC：-80%)との報告がある。
	ベキサロテン	ベキサロテンとの併用により本剤のAUCが約50%低下したとの報告がある。
	陰イオン交換樹脂	本剤の血漿中薬物濃度が約25%低下したが、LDL-コレステロールの低下率はそれぞれを単独で使用したときより大きかった。

線異常等が認められた場合には投与を中止し、副腎皮質ホルモン剤の投与等の適切な処置を行うこと。

(2)その他の副作用

種類	頻度不明
皮膚	そう痒感、発疹、皮疹、発赤、皮膚乾燥、皮膚亀裂、脱毛症、光線過敏、爪の障害
血液	貧血、白血球減少、血小板減少
肝臓	AST(GOT)上昇、ALT(GPT)上昇、 γ -GTP上昇、Al-P上昇、LDH上昇、肝障害
消化器	アミラーゼ上昇、下痢、軟便、嘔気、悪心、胸やけ、便秘、胃不快感、心窩部痛(心窩部の疼痛)、腹部膨満感、食欲不振、消化不良、嘔吐、胃炎、口内炎、腹痛、口渇、舌のしびれ、口のしびれ、膵炎、胆汁うっ滞性黄疸、舌痛、舌炎、口唇炎、咽頭不快感
呼吸器	咳
筋骨格系	CK(CPK)上昇、筋肉痛、背部痛、頸・肩のこり、こわばり感、痙攣、無力症、関節痛、胸痛、筋炎、血中ミオグロビン上昇、腱炎、腱痛
感覚器	異常感覚、末梢神経障害、耳鳴、霧視
精神神経系	めまい、不眠(症)、四肢しびれ(感)、眠気、勃起障害、健忘症、抑うつ、悪夢
内分泌	テストステロン低下、コリンエステラーゼ上昇、TSH上昇、ACTH上昇、アルドステロン低下、女性化乳房
代謝異常	グルコース上昇、HbA1c上昇、血清鉄低下、低血糖症
腎臓	K上昇、BUN上昇、血中クレアチニン増加、血尿
その他	頭痛、全身倦怠(感)、浮腫(顔面・四肢等)、脳梗塞、肺炎、帯状疱疹、動悸、味覚異常、着色尿、熱感、頻脈、頻尿、排尿困難、発熱

4. 副作用

本剤は使用成績調査等の副作用発現頻度が明確となる調査を実施していない。

(1)重大な副作用 (頻度不明)

- 横紋筋融解症、ミオパチー**：筋肉痛、脱力感、CK(CPK)上昇、血中及び尿中ミオグロビン上昇を特徴とする横紋筋融解症があらわれ、急性腎障害等の重篤な腎障害があらわれることがあるので、観察を十分に行い、このような症状があらわれた場合には直ちに投与を中止すること。また、ミオパチーがあらわれることがあるので、広範な筋肉痛、筋肉圧痛や著明なCK(CPK)の上昇があらわれた場合には投与を中止すること。
- 免疫介在性壊死性ミオパチー**：免疫介在性壊死性ミオパチーがあらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- 劇症肝炎、肝炎、肝機能障害、黄疸**：定期的に検査を行うなど観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し適切な処置を行うこと。
- 過敏症**：血管神経性浮腫、アナフィラキシー反応、蕁麻疹を含む過敏症状があらわれたとの報告があるので、このような症状があらわれた場合には投与を中止すること。
- 無顆粒球症、汎血球減少症、血小板減少症**：無顆粒球症、汎血球減少症、血小板減少症があらわれることがあるので、定期的に検査を行うなど十分な観察を行い、異常が認められた場合には投与を中止し適切な処置を行うこと。
- 中毒性表皮壊死融解症(Toxic Epidermal Necrolysis：TEN)、皮膚粘膜眼症候群(Stevens-Johnson症候群)、多形紅斑**：中毒性表皮壊死融解症、皮膚粘膜眼症候群、多形紅斑等の水疱性発疹があらわれたとの報告があるので、このような症状があらわれた場合には投与を中止すること。
- 高血糖、糖尿病**：高血糖、糖尿病があらわれることがあるので、口渇、頻尿、全身倦怠感等の症状の発現に注意するとともに、定期的に検査を行うなど十分な観察を行い、異常が認められた場合には投与を中止するなど、適切な処置を行うこと。
- 間質性肺炎**：間質性肺炎があらわれることがあるので、長期投与であっても、発熱、咳嗽、呼吸困難、胸部X

5. 高齢者への投与

高齢者では、副作用が発現した場合には投与を中止するなど、適切な処置を行うこと。[一般に高齢者では、生理機能が低下しており、本剤のC_{max}、AUC_{0-∞}は高齢者で増加することがある。また、横紋筋融解症があらわれやすいとの報告がある。]

6. 妊婦、産婦、授乳婦等への投与

(1)妊婦等

妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には投与しないこと。[動物実験で出生児数の減少及び生存、発育に対する影響が認められ、胎児にも生存率低下と発育抑制が認められている。また、ラットに他のHMG-CoA還元酵素阻害剤を大量投与した場合に胎児の骨格奇形が報告されている。さらに、ヒトでは、他のHMG-CoA還元酵素阻害剤で、妊娠3ヵ月までの間に服用したとき、胎児に先天性奇形があらわれたとの報告がある。]

(2)授乳婦

授乳婦には投与しないこと。[ラットで乳汁中への移行が報告されている。]

7. 小児等への投与

低出生体重児、新生児、乳児、幼児又は小児に対する安全性は確立していない(使用経験が少ない)。

8. 適用上の注意

薬剤交付時

PTP包装の薬剤はPTPシートから取り出して服用するよう指導すること。[PTPシートの誤飲により、硬い鋭角部が食道粘膜へ刺入し、さらには穿孔を起こして縦隔洞炎等の重篤な合併症を併発することが報告されている。]

【薬物動態】

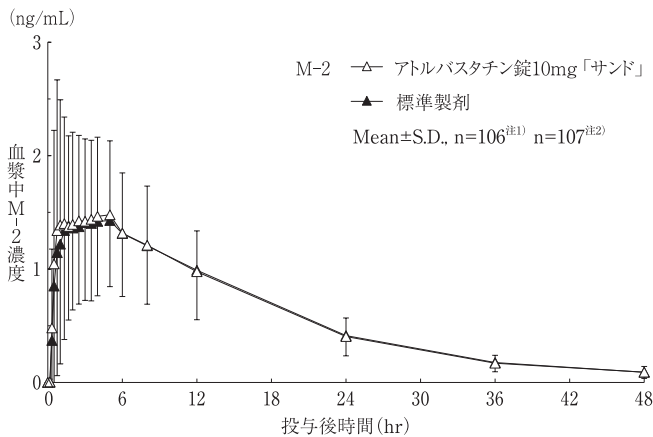
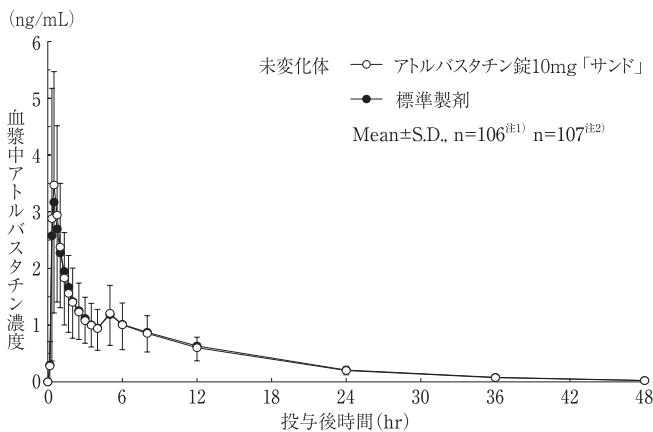
1. 生物学的同等性試験

アトルバスタチン錠10mg「サンド」と標準製剤を、クロスオーバー法によりそれぞれ1錠(アトルバスタチン10mg)健康成人男子に絶食単回経口投与して血漿中未変化体(アトルバスタチン)及び活性代謝物(M-2)濃度を測定した。

得られた未変化体の薬物動態パラメータ(AUC、 C_{max})について統計解析を行った結果、対数値の平均値の差の90%信頼区間が $\log(0.8) \sim \log(1.25)$ の範囲内であり、両剤の生物学的同等性が確認された(「後発医薬品の生物学的同等性試験ガイドライン(平成18年11月24日付薬食審査発第1124004号)」に基づく¹⁾)

また、アトルバスタチン錠5mg「サンド」は「含量が異なる経口固形製剤の生物学的同等性試験ガイドライン(平成18年11月24日付薬食審査発第1124004号)」に基づき、アトルバスタチン錠10mg「サンド」を標準製剤としたとき、溶出挙動が同等であり、生物学的に同等とみなされた²⁾。

アトルバスタチン錠10mg「サンド」投与後の血漿中濃度推移



薬物動態パラメータ

	製剤	AUC ₀₋₄₈ (ng·hr/mL)	C _{max} (ng/mL)	AUC _∞ (ng·hr/mL)	MRT (hr)	T _{max} (hr)	T _{1/2} (hr)
未変化体	アトルバスタチン錠10mg「サンド」	20.29 ±5.69	4.48 ±2.11	21.03 ±5.83	9.88 ±1.96	0.78 ±0.58	9.12 ±2.79
	標準製剤(錠剤、10mg)	20.68 ±6.74	4.10 ±2.00	21.42 ±6.84	10.05 ±1.77	0.95 ±0.77	9.01 ±2.52
M-2	アトルバスタチン錠10mg「サンド」	28.12 ±10.43	2.15 ±1.29	29.76 ±10.74	13.37 ±2.09	2.75 ±2.24	11.14 ±2.83
	標準製剤(錠剤、10mg)	28.05 ±10.85	2.04 ±1.13	29.66 ±11.28	13.56 ±1.81	2.98 ±2.56	11.05 ±2.42

(Mean±S.D., n=106^(注1) n=107^(注2))

注1)アトルバスタチン錠10mg「サンド」投与群

注2)標準製剤投与群

血漿中濃度並びにAUC、 C_{max} 等のパラメータは、被験者の選択、体液の採取回数・時間等の試験条件によって異なる可能性がある。

2. 溶出挙動^{3),4)}

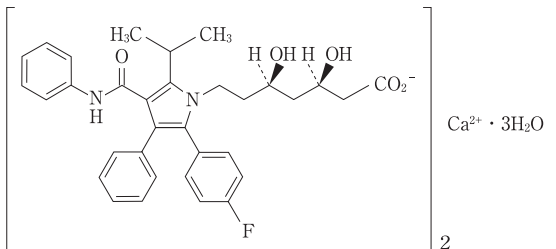
アトルバスタチン錠5mg「サンド」及びアトルバスタチン錠10mg「サンド」は、日本薬局方医薬品各条に定められたアトルバスタチンカルシウム錠の溶出規格に適合していることが確認されている。

【薬効薬理】

アトルバスタチンカルシウム水和物は、コレステロール生合成の律速酵素であるHMG-CoA還元酵素を選択的に阻害することによってコレステロールの生合成を抑制する⁵⁾。

【有効成分に関する理化学的知見】

構造式：



一般名：アトルバスタチンカルシウム水和物
(Atorvastatin Calcium Hydrate)

化学名：Monocalcium bis [(3*R*,5*R*)-7-[2-(4-fluorophenyl)-5-(1-methylethyl)-3-phenyl-4-(phenylcarbamoyl)-1*H*-pyrrol-1-yl]-3,5-dihydroxyheptanoate] trihydrate

分子式：C₆₆H₆₈CaF₂N₄O₁₀ · 3H₂O

分子量：1209.39

性状：白色～微黄白色の結晶性の粉末である。

メタノールに極めて溶けやすく、ジメチルスルホキシドに溶けやすく、水又はエタノール(99.5)に極めて溶けにくい。光によって徐々に黄白色となる。

結晶多形が認められる。

【取扱い上の注意】

1. 保管方法

- 1) 使用期限内であっても、開封後はなるべく速やかに使用すること。
- 2) アルミピロー開封後は湿気を避けて保存し、服用直前までPTPシートから取り出さないこと。
- 3) やむを得ず、PTPシート又は瓶から取り出して保管する場合は湿気を避け、一包化するときは気密性の高い容器で保存し、必要に応じて乾燥剤を入れるなど十分注意すること。

2. 安定性試験^{6),7)}

最終包装製品を用いた加速試験(40±1℃、相対湿度75±5%、6ヵ月)の結果、アトルバスタチン錠5mg「サンド」及びアトルバスタチン錠10mg「サンド」は通常の市場流通下において3年間安定であることが推測された。

【包装】

アトルバスタチン錠5mg「サンド」：100錠(PTP)
500錠(PTP、バラ)
700錠(PTP)

アトルバスタチン錠10mg「サンド」：100錠(PTP)
500錠(PTP、バラ)
700錠(PTP)

【主要文献】

- 1)アトルバスタチン錠10mg「サンド」の生物学的同等性試験に関する資料(サンド株式会社社内資料)
- 2)アトルバスタチン錠5mg「サンド」の生物学的同等性試験に関する資料-溶出試験-(サンド株式会社社内資料)
- 3)アトルバスタチン錠5mg「サンド」の溶出試験に関する資料(サンド株式会社社内資料)
- 4)アトルバスタチン錠10mg「サンド」の溶出試験に関する資料(サンド株式会社社内資料)


- 5)第十七改正日本薬局方解説書(廣川書店) C-168(2016)
- 6)アトルバスタチン錠 5 mg 「サンド」の安定性試験に関する資料
(サンド株式会社社内資料)
- 7)アトルバスタチン錠10mg 「サンド」の安定性試験に関する資料
(サンド株式会社社内資料)

【文献請求先】

主要文献に記載の社内資料につきましても下記にご請求下さい。

サンド株式会社 カスタマーケアグループ

〒105-6333 東京都港区虎ノ門1-23-1

 0120-982-001

FAX 03-6257-3633

* 製造販売

サンド株式会社

東京都港区虎ノ門1-23-1
URL:<https://www.sandoz.jp/>